

もう一つの登録有形文化財

三重大学 三翠会館

三重高等農林学校の開校10周年記念事業により、同窓会館として、昭和11年(1936)に建築されました。三重大学の自学史関係資料を展示しています。

[平日9:00~16:00開館、入場無料]

● 三翠会館に関するお問い合わせ

TEL 059-231-9677



世界一の環境先進大学の情報発信・交流拠点

三重大学 環境・情報科学館 (MEIPL)

MEIPLの意味: Mie Environmental & Informational platform

様々な環境に関する情報発信の拠点として、また、環境教育の普及・啓発やデジタル時代に対応した学習スペースを提供しています。学生や教職員だけでなく、地域の方々も利用できる建物です。

● 環境・情報科学館に関するお問い合わせ

TEL 059-231-9823



問い合わせ

三重大学施設部施設企画チーム

TEL 059-231-9966

E-mail raymond-sisetsu@ab.mie-u.ac.jp

● 交通案内

1. 津駅東口バスのりば「4番」から三重交通バスで「白塚駅」、「太陽の街」、「三重病院」、「棕本(むくもと)」、「豊里ネオポリス」、「三行(みゆき)」行きで、「大学病院前」下車。「大学病院」行きで「大学病院」下車。バスで約10分。

2. 津駅からタクシーで約10分。

3. 近鉄江戸橋(三重大学前)駅から徒歩で約15分。

※公共交通機関でのお越しをお願いします。

● ご案内図



登録有形文化財

三重大学 レーモンドホール

~三重大学ミュージアム構想~



◎アントニン・レーモンド (Antonin Raymond 1888~1976)

アントニン・レーモンドはボヘミア(現チェコ)生まれの近代建築家。初来日は大正8年(1919)、帝国ホテル設計を依頼されたフランク・ロイド・ライトに伴われてでした。しかし、翌年には独立し、日本の建築家として歩み始めます。戦中戦後は離日しますが、昭和23年(1948)には日本での建築活動を再開します。日本におけるモダニズム建築の先駆者で、前川國男、吉村順三、ジョージ・ナカシマ、増沢洵などの日本人建築家を門下から輩出しています。



◎レーモンドホールの歩み

レーモンドホールは三重県立大学(昭和25年創設)の図書館として、アントニン・レーモンドの設計により、昭和26年(1951)に津市大谷町(現三重県総合教育センター・三重県立美術館所在地)に建築されました。

三重県立大学はその後、国立三重大学との統合のため、昭和44年(1969)には、国立三重大学に隣接する江戸橋に移転しました。移転に際して、レーモンドホールのみは解体移築され、内部間仕切りが変更されて、水産学部の食堂に転用されました。レーモンドホールに寄せる三重県立大学関係者の想いが偲ばれる移築でした。

水産食堂と称されたレーモンドホールは、昭和47年(1972)の三重大学への移管後も、引き続き食堂として利用されてきましたが、昭和62年(1987)の水産学部の生物資源学部への統合改組、平成2年(1990)の新校舎への移転に伴ってその役割を終えることになりました。

三重大学では、その歴史に関わる記念的建造物として、保存活用を図ることとし、設計者アントニン・レーモンドにちなんで名称もレーモンドホールと改称しました。平成15年(2003)3月18日付で、「造形の規範となっているもの」に該当するものとして、国登録有形文化財の登録が行われています。

その後、平成25年度には、耐震性の向上及び活用を目的とする保存修理工事が行われましたが、同時にレーモンドホールの文化財的な価値を維持し、高めることにも努めました。移築の際に変更されていた正面入り口回りや内部隔壁(部分)は、この工事によって復原されています。

◎レーモンドホールの建築

レーモンドホールは木造平屋建て、緩やかな軒出の深い鉄板葺切妻造の屋根を架けています。平面は平側が12尺×7間、妻側が15尺×2間の単純な矩形平面です。内部は当初、棟通りに間仕切り壁が設けられて、閲覧室と開架書庫に二分されていました。大谷町キャンパスでは、門を入ってすぐ左手に折れると、書庫側を正面として配置され、開放的な閲覧室は溜池に面していました。閲覧室と溜池の間はOUTDOOR READINGとして設計されており、芝生に車座となって談笑する学生たちの姿もしばしば見られました。

現在の江戸橋キャンパスでは、南門近くの位置に、東西棟、北入口の建物として配置されています。移築時には旧閲覧室と旧書庫の間の壁が撤去されて、1室の広間に改造されています。また、東面には移築時に増築された鉄筋コンクリート造平屋建の厨房が接続していますが、北面は出入口とガラス窓、南・西面は全面に引き違いガラス戸が用いられ、極めて開放的な外観となっています。

室内には柱・棟木・地棟・母屋・垂木・火打梁などの最小限の丸太材で構成される架構がそのままあらわれ、強い秩序を生み出しています。

レーモンドは戦後、このような小径の丸太材を構造材とする一連の木造建築を試みます。その中でも昭和26年(1951)建築のレーモンドホールは同年の麻布自邸とともに、最も早期の作品にあたります。



三重大学ミュージアム構想

三重大学は、老朽化していた“レーモンドホール”を、平成25年度(2013)の耐震性の向上及び活用を目的とする保存修理工事に伴い復原させるとともに、学内だけでなく地域に開放した芸術・文化活動の拠点として、平成26年4月15日にリニューアルオープンしました。

これを機に、“レーモンドホール”に加え、世界一の環境先進大学を目指す三重大学の環境教育・研究の拠点として平成24年(2012)3月にオープンした“環境・情報科学館”及び、三重大学の歴史や文化資料展示の場となる“三翠会館”を繋ぐ、「三重大学ミュージアム構想」を立ち上げ、大学キャンパス内の知のトライアングルとすべく、プラットホーム創りを推進していきます。

さらに平成26年4月にオープンした三重県総合博物館(MieMu)との連携による学芸員養成や、周辺地域の多様なミュージアムを繋ぐミュージアムツアー、また、広域に及ぶグローバル連携などによって、三重に根差し、世界に通用するグローバル人材の育成など、学内ミュージアム施設の活用範囲を広げていく考えです。

「三重大学ミュージアム構想」イメージ図



ミュージアム構想に基づくレーモンドホールの段階的活用イメージ

